

六月十日

重い曇天。九時過世田谷発。十時研究室大学院レクチャー準備。十時四〇分院レクチャー。今日から三回程は私の建築設計方法について述べる。第一回は宿根木に学ぶ。岡山建部町国際交流館、第七官界、鳴子・早稲田棧敷湯、西早稲田観音寺。陸の大王と船大工の数学の違いの表現について。十三時過李祖原と昼食。ベジタリアンカレー。

午後打合せ、幾つか。李祖原明日帰国でサヨナラ、又、来月。赤坂喜顕氏来室。九州現場の件でお願い事。赤坂氏は今年より竹中工務店から早大芸術学校教授に転職。話を聞くと、大変な情熱で授業その他に取り組んでいるようだ。教職は情熱が現場で学生に伝えられなくなったらおしまいなのを、改めて教えられたような気がした。十八時過ぎよりスタッフ、学生に私の過去の作品をスライドレクチャー。スタッフに対してと同じ事である。彼等は私の鏡なのだ。私が情熱を失えばたちどころに同じになる。力をみなぎらせていけば、少しづつではあるが染み渡るだろう。

二十二時世田谷村に戻る。電車の吊し広告に週刊新潮の内容が示されていて、「小泉『靖国参拝』私はこう考える」の中に木田元の名があり、木田先生がこういうところでのどのような意見を述べているのか興味深く、買って読んだ。高山建築学校でお目にかかっていた木田さんは大哲学者というよりも、特攻隊生き残りの闇屋の風格をにじませていたので、靖国には特別な関心をお持ちなのだろうといささか揺れる気持ちもあったが、読めば、やはり

参拝反対の意見を述べられていた。木田さんらしい体験に根を張った一見地味な発言であったが、要は中国での植民地支配時代の記憶は日本人だけの論理で片付けることはできないというモノ。他にも多くの人の意見が述べられているが、それぞれの人間の風格の水準が知れて面白い。有名人というのは、何によって有名になったか、その根本の性格が知れるような気がした。木田先生だけ顔写真が出ていないのも良かった。同誌に「福田和也の闘う時評」拡大版「日本人にとつての『A級戦犯』」もあつた。福田和也の論は堂々たるものがあるが、私はやっぱり首相の靖国参拝は反対である。

私の父、興武は、第二次世界大戦で中国の戦場にかり出され、傷を負い帰還し得た。負傷していなかったら戦場に消えていたかも知れない。幼児、近くの銭湯に父と共に行くたびに、私は父の背中に残されていた鮮烈な傷の痕を見ていた。父は漢文学者の端くれであり、中国の歴史、文化には大きな敬意の念を持っていた。私のいささかな漢文趣味もその影響がある。李祖原の過剰とも思える中国主義にいささか違和感を持ちながら、彼の中国本土での仕事に協働しているのも、父の影響があると思つている。父の背中の傷が私の戦争への記憶のルーツだ。父は老いてから何度か母と共に中国を旅行した。それが彼のささやかな悲願だった。父から戦争の話、その正否の話を聞いた事はない。中国文化を愛し、しかしその中国での戦場にかり出され、死生の境をさまよう傷を負った。銭湯で見た父の背中への傷は、おそらく大きな矛盾を生きたるを得なかつた父の生涯の歴史の跡であつた。父は何も言わなかつた。今の靖国問題にも父のようにあまりにも巨大な矛盾と対面した経験を持つ故に、戦死者と同様に語り得ぬ人々が多くいるだろう。小泉首相の一見歯切れの良い発言と彼等の複雑な矛盾を

う。抱き込んだ沈黙との間にはあまりにも大きな距離があるように思